月　刊

Mélange

Vol.139

2019.01.27

詩と評論

月刊「Mélange」 Vol.139 2019.01.27 「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」139号　目次

詩

あやまち……野口裕　03

朝焼けの遠くに ……にしもとめぐみ　04

奄美／沼島 Amen ……高木敏克　05

ことば（3）……月村香　06

ざんばら ……大橋愛由等　07

神慮の可憐な赤い花 ……法橋太郎　08

石器 ……中嶋康雄　09

呪性の荒野に嵐吹き……精神病理学教室へ ……冨岡和秀　10

3　研究室にすべりこんできた同僚へ……岩脇リーベル豊美　11

連載

神戸詞（うた）あしび 128「西郷（せご）どんに込められた奄美の幕末の社会」……大橋愛由等　12

編集部だより★58／2018年から2019年にかけての年末年始を振り返ってみた。若い世代は年賀状を書かない。ほとんどLINEですませている。これはこれで合理的である。わたしの知人・友人にも年賀はがきを交換するという慣例を「虚礼」だと断じて、いっさいださない人もいるぐらいだから、年賀はがきにこだわっているわけではない。しかも今年から一葉62円と値上がりして、ほぼ無料で送れるネット年賀挨拶よりはるかに高額な媒体となり、その経済的負担も軽くない。若者ばかりではなく、〝終活〟の一貫として、年賀を今回限りで終了する高齢者もいる（私のもとにはまだ〝終活年賀終了通知〟は届いていないが）。退職したひとは、突然年賀挨拶の量が減ってしまう悲哀を味わう人もいるだろう。わたしの友人関係は仕事ではなく文学縁でつながっている人がほとんどなので、こうした変化はない。いつまでも出し続け、いつまでも私のもとに届く（同じはがきが何枚も届くようになれば、その人の認知症を疑ってもいい）。わたしの年賀挨拶は、かつてネットが発達していなかった1980年代にはじめた「はがき通信」にそのオリジンがある。「まろうど通信」という名で、毎月出していた。いまも文字中心で構成されている。友人の中には毎年隅から隅まで読んでいますと書いてくれる人がいて、悦しいかぎりである。おそらくこれからもこの形式で出しつづけるだろう。★第139回「Mélange」読書会は、濱田洋一氏に南方熊楠について語う。2014年10月につづいて二回目の語りです。濱田氏の熊楠語りも濃密である。（大橋愛由等記）

◆あやまち

野口裕

これで十万回目
適当に乱数を割り当てたはずなのに
分岐点にさしかかると
いつも同じ行動をする
頑固なロボットだ
作者の俺とは似ても似つかない

どうしてそうなるのか
よく分からない
学習に与えた歴史のドリルのせいか
訓練中の北風のせいか
あるいは
擬似的にあてがった母のせいか

断れば良かったんだ
母になると手を上げたそのときに

だけど俺は頼んでしまった
転んだときに
じっと見守る母を

たぶん解体しても
ロボットの霊というやつが
やって来るんだろうな
そして同じ行動をする

ああ分かった分かった
状況はいつも変化するけれど
行動は常に変わらない
そんな奴がいても良い
ちょっとした理想だな
戦闘ロボットよ

◆朝焼けの遠くに

にしもとめぐみ

空はゆっくりと目を覚ます
雲が陽に照らされて
彩られ　薔薇色の微笑みを祝福する

日一日と風　風　空風

地には　夏草が枯れて
空には　青桐　花水木　南京櫨
葉を落として裸の腕を天に伸ばす
新しく　芽吹く　命息づく

蛹は春を待っている
長い冬を私も　持つだろう

土塊を耕し
小石を取り除き
種を蒔き　球根を植える

その眩い日に
暖かい風が吹く

◆奄美

高木敏克

白骨は珊瑚とともに石に戻るエラブでは珊瑚は海が洗い人骨は女の手で洗われたい。
洗骨が時に洗われ白浜に消えてゆくとしても時間が消えなければそれも良い。
空路では白煙になって空を舞う気分だが海路では髑髏が静かに夜行貝と話すのが聞こえてくる。炭酸カルシュームの循環に私も巻き込もうとしている孤島は懐かしさに満ちている。時間の流れを純粋に感じるためには島に行けばよい。抱擁は海であり空でありすべてを受け入れて解き放してくれるだろう。鹿児島沖永良部島徳之島奄美大島を渡り鳥が風に乗り鯨は潮に乗り人間は歌に乗ってやってくる。シマンチュウはイヤサッサわたしときたらホイサッサと足元のタメが足りない。
地に下りて限りなく歩きなさい。海を渡り歩きなさいというお言葉を日本国空ボンバルディア機内アナウンスで聞いた。海は歩けないのでとりあえずフェリーで次の島に着いたらそこでアスリートの神父様にであった。日に焼けた神父様はイエス様の影法師が立ち上がったお姿に見えた。私はイエス様が親指で水面を駆け抜けたアスリートであることを知っていた。神渡りの伝承で地球はアスリートに満ちていることもわかっていた。たぶん神父様も親指で走れば風になれることを知っておられる。私は親指で走っていますと告白をした。すると神父様はそれを知っているのは信仰の証なのだとお答えになられた。そのように神はどこにでもそのお影を投げかけておられる。それを見つけるのはあなたなのだとアスリートの神父様は笑いながら話されるので、初めて神父様に抱き着いてしまった。だれもが抱き合ってお互いに抱き合った。それは奇跡だとオニもカラスも泣いて笑った夜だった。

◆沼島Amen

高木敏克

白骨に夜行貝が静かに語り始める寒天状の午後
孤島ではビニール傘が全員にゆきわたる
少女たちが拝むのは海底から立ち上がる立石
やがてそれを中心に空が回り始めるだろう
クラゲの群れが渦潮に巻き込まれるここはお
のころ

レコードB面では酢のものがおいしいと歌う
　しかない
目が回り死にそうなわたしたちはは早くA面
　にもどりたい
レコードの穴には半紙を二枚重ねて貼ってお
　いたのに

ひっくり返したのはお兄ちゃんなのね
ねえB面は死にそうなのもとに戻して
柔らかくなったり硬くなったりするこれはなに
ハブの港のハモ料理は少し変すごく変

ここは沼島レコードの穴から覗いてごらん
穴のむこうでお空が回っているのが見えるだろ
あれは立石突き刺さって海をかき回している
　ほら
ああ見えないお兄ちゃんがのぞいているからよ

ここではポルカマズルカの盆踊り
空と海がちぐはぐに回るから星空は消えている
はやくA面にひっくり返してクラゲになって
　踊りましょ
片手で抱いて地軸の周りを踊りましょ

ほらひっくり返っておめでとう
地軸が傾くまで足元が沼になるまで踊ろうね
真っ暗闇の夜行貝が静かに眠り始めるよ
この雨はいつまで降るのだろう

◆ことば (3)

月村香

エコリエールのころから意識したのではないことの始まりは生まれ落ちた瞬間からもうすでに恋に落ちているつまりそういうややこしいことを人々は経験しそれをどうにか美しく傷口にオロナインやリンデロンVG軟膏を塗るように癒やすのが詩人だ本読みは突然詩にベゼ（baiser)されると天にも昇る気分子どもたちはよくビズ（bisou）をし合う今わたしに花の名前が浮かんでふっと忘れてしまったのだけれどたくさんの花は存在しつつ哲学しているところでその中の一本だけがそこからはずれる手折られたのだ心があまり弱すぎていやそんなことを書き記すまでもなく苦しいのが恋である以上も以下もない生まれてこなかったらとさえ思うだろうわたしはちょっと冷えぎみの赤ワインはおいしいと思うけれど彼はお酒が飲めないの酒をよくのみ消化するただそれだけの夜はふるえていたかもしれないけどそんな夜は酒を飲む気もしていなかったのかもしれない君は思わずoh! de l'eau（水）と言ったね哲学する花にはやはり酒より水だわと叫ぶとあなたがそして光だねと言いながら大型船が出て行くリボンが飛び交い乗客たちと彼らが約束されてもいない未来にベゼし合う

＊baiser＝口づけ
＊bisou＝ちゅっ
＊oh! de l'eau＝おお！水を！

◆ざんばら

大橋愛由等

単色の海辺からの骨片の語りかけをこばめば
（乗船名簿には白桃がのけぞっていたので、海面を見ることなくたどり着いたその地の古い街角を曲がる時に振り向かず歩行していたワタシは、白い記憶から会釈され、ざんばらのままで「ここ」と指差す先は、石色の壁面だったので、とうとう白桃をつきとめたかのように思えたのだが、「地ではなく血」と言い捨ててワタシの記憶に遺ることを忌避しようとしていることは薄々わかっていて、白桃が自転車に乗っていてこけてしまった溝はどこだったのかと捜しているうちにたどり着いたのは、コトバの群れが群れ語りをしている地所であったのだが、その隣りは更地のままだったのでやはり「地ではなく血」なのかと二度半首を傾げていたところ、沈黙していた黄ばんだ風が、ひきつった笑顔を向けたからといって群れ語りはやまないよと言いたげであった。群れ語りの中からひとつずつ母音と子音を峻別していたのはワタシだったのか白桃だったのかあいまいなままに迎えた商人宿の朝は母系によって伝えられた鳥になる夢から醒めたばかりで、鳥瞰していた海面に群れていた赤色の魚たちもやはり母音と子音を区別しながら南溟に向かっていたことを確認して今朝も群れ語りをしている地所に歩行していこうとほうほうと考えていたところ、そこにはきっと今日も白桃はいないに違いないのだから、白い記憶と語り合うことでワタシの前に姿を見せようとしないのは、小さく動く指先からこぼれ出る喜劇の一幕なのだろうかと、神話的に曇天を眺めつつ、はたしてワタシは白桃に逢ったことはあるのだろうかと、いまさらながら思い起こしていた水曜日であった。

◆神慮の可憐な赤い花

法橋太郎

考えれば、おれにかかわる問題は山積している。水源地にゆくまではそれらのことがおれのなかで明滅していた。断崖に接して建っているしろいアパート。踏み外されて底の抜けている階段。ひっそりとした午前だったが、家家にはひとの気配が充ち溢れていた。

昨日の雨のこともあって水嵩の増した川はいつもより魅力的に見えた。滝があって、岩を滑って滝壺に落ちる飛沫がひときわ眼に残った。水の生きているのがまざまざと分かった。時節をすぎた藤の花がそれでも紫青の花を垂らしていた。おれたちの考えることはさまざまだ。ものの見え方のみならず、ものへの接し方もそれぞれ予想以上に違うことが見てとれる。ものごとへの視線や言葉。おれたちはまったく別のひとなのだ。

水源地にたどりつくまでに山を愛するひとたちとの挨拶がいくつかあった。その挨拶が山という神に捧げられるうつくしい言葉として感じられた。いくつもの階段を上ってきて、この湖をめぐることになった。ここで生きている風よ吹け。

この湖のまわりにおれたちがやって来たのを知って、亀たちがくるりとからだを反転させて、水のなかに跳ね落ちた。今日さきにここにめぐってきたひとのこころの贈物として、手すりにつながる杭のうえ、赤い藪椿が添えられている。

つきあいの浅いおれたちが、水源地にゆくことになるまでを考慮すれば、いくつかの必然と偶然の影、そこに織りなされてゆく様子がよく分かる。そのときどきの考えが組み合わされて必然と偶然から共にあることの錦としてこの湖をめぐっている。

やわらかな風の吹くなかでおれたちは息を調える。この水源地ぐるみのいのちがひとつになって、確かめ合うその応答の声がこころの枝のように伸びてくる。おたがいの知らなさを識ってゆく。

おれたちは手や足をもち、呼吸より生じるいのちを保っている。まだぬかるんでいる泥道を避け、深い枯葉の重なりを踏みしめる。すこし滑るみちにあって、修羅のようなひとびとのつく悪態にまみれきることがない。山をくだるにつれて、おれたちはたがいに声を発しつつ、それぞれの魂の孤独をときほぐしていったのだった。

◆石器

中嶋康雄

クローンを殺し
埋めるために掘っている
石器が出てくる
現場には飴がはびこり
証明郵便を待っている
なにを証明するというのか
「石器は終わりの予兆だ」
スコップを持った隣人が言うので
何の終わりかときいてみると
宇宙の終わりだという
隣人は土を消化する酵素があるらしい
いつも口をもぐもぐ動かしている
ぼくは突っ立っている
ぼくは飴より下位だ
ぼくは土を食べられない
ぼくは汚水も飲めない
ぼくは雑草も食べられない
ぼくは腹をくだしながら
ぼくは腹がへっている
ぼくが石をなめてもなめてもとけない

石器が出てきても
なんの腹のたしにもならず
水筒に残ったぬるい水を少し飲む
クローンは何のクローンなのか
もう誰にも分からないらしい
今となってはそれは腐りかけているから
いやな虫が集まっているし
はやく埋めてしまわなければ
崩壊するなにかがあるらしいが
石器が出てきたからには
当分作業はできないらしい
埋める作業が行われているとする部局
埋める作業は中止されているとする部局
予算が凍結される
責任者が更迭される
弁当が配達されなくなる
給水がとめられる
隣人は土を食べている
ぼくは突っ立っている
ぼくは腹がへっている
ぼくはのどがかわいている
ぼくはあつい
ぼくはかゆい
ぼくはさけぶ
隣人は土を食べている
風がふいている
石器がまた出てくる

◆呪性の荒野に嵐吹き

……精神病理学教室へ

冨岡和秀

うううう……わわ……ああ……ら……。うし……し……。うし……しにア……ラシが……。うしなわ……たしにアラシ……ふく。

声が時に失われる吃音、この吃音は何ごとを表しているのか？　わたしという器からワタシがこぼれ続けているから吃音になるのだろうか。うしなわれる私はわたしからこぼれるワタシか。

伸びる、縮む、途切れる、たわむ、ゆがむ、ねじれる、裂ける、ねじ切れる、という過程をたどりながら遍歴のち「失われる私」が行き着いた講義室は、嵐吹く土地の道を通り、長い階段を降りた地下の教室である。地上は見えない風が吹き荒れ呪性に満ちている。夕陽が沈む頃「失われる私」はこの地下教室に逃亡して座を占める。何が失われるのかを知るために。そして「失われる私」の「わたし」が何処へ向かうのかを知るために。

強い磁場を持つその地下の場所は精神病理学教室で、オイディプス擬きの人物が「その事柄」を顕わにするために話す筈だ。話すのは精神病理のスペクトル原因を探究するためではない。むしろスペクトルの効用を最大化する方法について話すのだ。この講義は「失われる私」と擬オイディプスとの対話形式の予定だ。対話による講義なのでその途中で「失われる私」と擬オイディプスの間には転移の可能性もある。「失われる私」と擬オイディプスとの密な対話のなかで、語り合う人格の互いの心理が交換されることもあるだろう。

擬オイディプスは、「失われる私」の「失われ」が「只今」にもたらす重要な事柄があるかどうかと問う。「失われる私」は如何にして何を失ったのか、と擬オイディプスは問うのである。

「失われる私」は、みずからの痕跡を振り返る。明るい地上の通行路において「わたしという器からこぼれるワタシ」が消えたのは、地上において、私と私でない者たちの交流の通行路がいつしか「裂ける」過程をたどっていたからだ。「裂ける」ことがなければ、まだしも、こぼれるワタシは「こぼれる」の後からワタシを回復することが可能であった。だが、通行路に嵐が吹き荒れその交流が裂けてねじ切れたのち、精神病理学教室に逃亡してきたというのが、「只今」ここに「失われる私」が座を占める経緯である。

「伸びる、縮む、たわむ」という動態ではスペクトルは明るい方から少しばかり薄暗くなるだけである。しかし「ゆがむ、ねじれる」という動態になるとスペクトルは明るさを徐々に減らし「こぼれる」という病いが増大するかのようになる。「途切れる」は「こぼれる」や「失われる」の潜勢態だ。いわば吃音と同じ無音を挟んだ宙ぶらりんである。「裂ける、ねじ切れる」に至って暗さを増し遂には螺旋形を描いてスペクトルは蟻地獄のような空洞へと雪崩を打って暗黒へ入り込む。したがって空洞へ引きこもるスペクトルの端は目に見えない。その時からスペクトルは蟻地獄の暗黒から「伸びる」の明るみまでのスペクトル状態を鮮明にする。「失われる私」の語ったのは、このような事柄である。

しかし、擬オイディプスが見たのは明るみから蟻地獄までのスペクトルが光の道を成している事である。光は漸減と漸増を繰り返す。スペクトルは光の通路でもあり、しかも〈闇に病む〉の通路でもある。明るみから発生した光の束は蟻地獄の闇まで光速で走り、逆に蟻地獄から明るみの端まで戻る、という運動を繰り返す。その光速運動の狭間はざまに時おり病いの破片が落ちる。いつしかその破片は群れになる。病いの破片が群舞する。「こぼれる」「失われる」という動態が病いへの道を指し示す。ワタシの代替である何事かを失ったがために病いが発生するのだが、その病いの破片が群れを成しているのはスペクトルの通行路だ。通行路は地上の交流の媒介から地下の精神病理学教室の中で明らかにされるスペクトルへ転位しているのだ。スペクトルは精神病理学教室における通行路である。

擬オイディプスは「失われる私」の「失われ」の原因は病いの破片群がスペクトル内に発生していることにあると話す。加えて、破片群には地上の交流が「ねじ切れ」隠されているからであると応答する。このスペクトルを腑分けして擬オイディプスは更に示唆する。スペクトル上に光の通路を見よ。ここには闇から光への道がある。

擬オイディプスは講師然としているが、「失われる私」が返す言葉に不安を覚え始める。「失われる私」は言う。

「失われるのは、なにも〈失われる私〉という名の私だけではない。擬きの人も失われる。私の地上での経験から言えるのは全て失われるというのが真実である。地上では噛み合わない言葉の群れが犇めいている。地上は呪性の満ちた荒野であり嵐が吹き荒れている。スペクトルに見出される病いの破片群は嵐吹く地上から降ってきた破片だ。私が内包する〈失われ〉は擬オイディプスも内包する。あなたがスペクトルに見出だす光は私には見えない。病いの破片が群舞するのが見えるだけだ。破片が群れるのは光があるからだ。擬オイディプスよ、あなたは光も病いも見え、私は〈病い〉しか見えない。真実の探究のために心的なるものは交換しなければならない。転移されなければならない」

呪性を帯びた地上からの暴風が精神病理学教室に舞い込み、瞬間、稲妻が光る。その時「失われる私」にも一瞬、光が見え、擬オイディプスの眼球を稲妻が撃つ。たちまち転移が始まり、心的なるものが交換される。それとともに「失われる私」は病いも光も投影するスペクトルの通行路を俯瞰可能となる。擬オイディプスは光を見失う。

「失われる私」と擬オイディプスが共に、病いも光も見る方途はない。ただ一つを除けば。それは地上に出て行く事だ。そこで病いと光を体現するのが地上の呪性を退却させる地平が開けるだろう。呪性が止めば、嵐は止む。こののち「失われる私」が擬オイディプスに講義を開始しよう。二人が共に病いと光を体現する方法を探究するために。この課題はスペクトルの効用を最大化する探究である。

後日譚だが、擬オイディプスは稲妻の光に眼球を撃たれた際に、マグマのような心底で心眼を開き、地下教室に飾られた花瓶の蕾が一斉に花開いた。

◆3　研究室にすべりこんできた同僚へ

岩脇リーベル豊美

数年来同室していた沖縄研究者の同僚は所謂LGBTとかQueerで、嘘をつくとか誤魔化すということを微塵も知らないので、むしろそうであることを誇りに思っているし、控えめではあるが同性愛者の権利を主張しているし、インターンシップのガイダンス枠を組みながら生活保護やジェンダーやポストコロニアルの話題のついでに、教会批判的(というより、それをないものとして生活してきた)自伝や家族構成を赤の他人の私に赤裸々に語ることがある。入室当初から同性愛者同士だけがわかるという、同じ傾向を持つ同性を即座に嗅ぎ分けることができると自負していたくせに、同類者の本質や特徴だった素振りを見せる同性には渋い顔をする。彼らは自分と同じ問題を抱えているというところが自己探求の出発点らしい。ここに来る以前、あるプロジェクトのために、更に三年一緒に住めないという理由で別れたらしい元彼との記憶は頗る壮絶であったように想像される。そういえば、二十年ほど前、隣家に住んでいた同性カップルは、末期には彼役の方が書き方は悪いかもしれない)彼女役の方に放った「お前はただの居候だ」との罵声が聞こえていた。沖縄文学をポストコロニアル理論から考察するために、私は又吉という二人の芥川賞受賞者の苗字をまったく取り違えて話していたが、やさしく応じて訂正することもなく、最後の義親子旅行ついでの研究資料収集の間にも、土産はシーサーに満たされた琉球泡盛を買ってきてくれた。その灰色の陶器の獅子は解雇された今でも、まだ開封されず、なみなみと満たされていて、我々のシステム違いで同化できないコピー機とコピー機の間に控えている。現在おつきありしている彼氏さんとそのお母さんと沖縄には一緒に行き、そのお母さんを仕事をすっぽかして看取り、お母さんと呼ぶその人の遺産を、親戚という人たちとの格闘の末に自分たちのものしたらしい。それ以来、というよりむしろそれ以前から病気になって、待つと伝えても、拙論文集には寄稿しなくなってしまった。

君の日本語はドイツ語そのものね。意味はわかるけど世間知らずで人に教えられるほどにはうまくないね。少なくとも先輩の私には「あなたは…」という主語で質問をしないでね。漢字も偏と旁が普通に逆だったし、識字障害と疑ったけれど、とにかくしゃべってしゃべって仕事ができなかったけれど、現在君が担当していた授業を肩代わりしているので、あの会話たちは無益ではなかったのかもしれないね。

自分の疾患を自覚していると言っていたが、本当に自覚しているとは思えず、毎週水曜は歯医者の予約で埋まっていて、内視鏡胃検査に尋常ではないほど恐れをなして、享年36歳で死ぬかも、とつぶやくのだった。太宰が好きだといったが、あの人は同性愛者ではなかったと記憶する。

今年の冬学期のはじまる前に、必要書類を返信するように送ったメールには返信がなかった。私は身の上相談や日本学に関する質問にも、時には苛立ちながらも真摯に答えていたから、いつも反省をまじえた返信をしてきたが、今回はなかった。私の娘にあっての感想は、彼がLGBTと知った上での秘書が驚くような反応で、「同性愛者である僕が息をのむほど美しい、国籍を超えた美しさだ　母(私)は日本人なりの美しさだが、彼女(娘)は世界的に通用する美しさだ」と言ってくれたのに。

最後に会ったのは、オープンキャンパスの「科学の長い夜」だった。本当に講演できるのか、ひやひやして待っていたが、最後の力を振り絞ったのか、案の定別れ際には、「次の半年は大学及び研究にはかかわらない」と彼なりの抵抗を示した。メールでしか話せない距離に住む、というより今となっては居どころさえもわからなくなってしまったから、遺産としてもらった家に住んでいるのか、沖縄文学とかポストコロニアル理論の学会で訪ねたハワイにでも住んでいるのか、今回も思い遣りいっぱいに綴ったつもりだったが、返信はなかった。

そういえば、一緒にバスに乗った帰路で、わたくしどもの婚姻承認者になってくれた友人が、(当時でいうホモセクシュアル、今でいう）Queerの音楽大学の先生に切ない恋をしていたことを思い出した。私はこのところ体調が悪く、文法説明の途中で咳き込んだり声をからしたりしていると、意外にも心配そうに見守っていたその人は今もホルモン剤を投与しながら研究を続けているのだろうか、と幾度となく懐かしくなるのである。

神戸詞あしび

128-2019.01.27 大橋愛由等

西郷（せご）どんに込められた奄美の幕末の社会

２０１８年のＮＨＫ大河ドラマ「西郷どん」をすべて観おえた。

あくまでも歴史ドラマであり、史実そのものを伝える番組ではないと分かっていても、ところどころツッコミをいれて鑑賞していた。

特に西郷隆盛が二度奄美に「遠島」される場面では、ドラマ製作者側の意図（奄美の側への若干過剰なシンパシー）が感じられ、やりすぎの表現もあった。

例えば、愛加那が先頭に立って島人（シマンチュ）を率いて叔父である島役人（本土でいえば庄屋階級）を奪還する目的で、薩摩武士の駐屯地に押し入る場面は、薩摩藩の領内における百姓階級に対する厳しい統治体制のもとでは考えられないことである（史実として徳之島で「母間騒動」1816「犬田布騒動」1864という一揆が発生しているが）。いくら名前を変えて奄美に流されていた西郷の正体が薩摩武士にしられたからといって、愛加那以下の島人がお咎めなしとはならないだろう。それに当時の奄美群島には、そんなに多くの薩摩武士は駐在していなかった。薩摩の奄美統治の巧みさは、領民を直接支配するのではなく、領民を統括する島役人層を支配することによって成り立っていた。

西郷隆盛が二度目に奄美に遠島された時の徳之島の蟄居跡

また島役人を捕縛する原因となった砂糖を隠し持っていた咎で薩摩武士が島役人の家宅を捜査する場面も、たとえドラマであっても疑問視される場面だ。

島役人のなかでも今でいう区長的な役割を与えている与人（よひと）クラスは、薩摩藩から請求されれば課せられた砂糖納税額よりも多く納税する姿勢を貫いており、その与人を捕縛するのは自分の首をしめることになる。〈薩摩役人 vs 島人（島役人層を含む）〉といった簡単な構図に収まらないのが奄美群島の幕末社会における複雑な社会なのである。

番組の中では、あくまでも島人は薩摩の圧政に苦しむ民として描かれている。その苦しみは今の奄美の人たちにもしっかりと受け継がれていて、苦しみの記憶は継承されていくだろう。しかしその奄美の民もさまざまであることも注視しておく必要がある。砂糖（さとう）づくりの場面が何度か出てきたが、愛加那の家のもとで働いていた島人の中にはヤンチュ（家人）という債務奴隷がまじっている。これは島人ひとりひとりに課せられた納税がさまざまな理由によってできなくなり、島役人層に肩代わりをしてもらう、つまり納税分を借入するわけである。形としては借入額を返済すれば、元の自作農（ジブンチュ）に戻れるわけだが、いちどヤンチュに身を落とせばそのままの身分でいつづける島人も多くいた。こうしたヤンチュを生み出す社会構造も、その背景に薩摩の過酷な税収奪体制があったことは事実だが、ヤンチュを多く囲い込み、より大規模な砂糖生産を実現し、課税額以上の砂糖を納税することによって、薩摩藩から「郷士格」の身分を与えられ、一字姓を名乗ることを許されたのは、島役人層であることも忘れてはいけないだろう。

最後に愛加那に言わしめたひとことを思い出してみよう。西郷は島津斉彬が民のために懸命に治世していたことを強調したのに対して、愛加那は「その民の中に島人は入っているんど？」と問いただした場面である。そこでハッと覚醒する西郷と場面がつづく。この愛加那の問いかけは、今も島人がヤマト（本土）にむけて発している問いかけのひとつであろう。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.139
神戸

2019年01月27日　通巻139号★
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)